

# 中学生がノンフィクションを読む意義

信州大学教授  
藤森裕治

中学校という時代は厳しい三年間である。

それまで身勝手な行動を抑制してくれていた従順という名の膜を、思春期の利己主義が引き裂き、一方ではガラス細工のように繊細な友人関係には神経をすり減らす。心と身体の不具合に翻弄され、屈託する間もなく自らの進路を決めねばならない。あたかもそれは、萌え出た若葉が深緑に移る前、悩ましげにもだえ縮れる季節の森である。

このような発達段階にある彼らにとって、ノンフィクションを読む意義は三つある。

第一は文筆家の川端氏も言うように、見知らぬ他者の営みが実に多彩で時にさまざまに、そしておもしろいのだという感覚をもつことにある。「恕」の精神で他者を尊重する姿勢が育つ臨界期は、中学校である。そのとき実在する他者の物語であるノンフィクションを読むことは、それ自体が他者を思う経験となる。

第二は、事実が物語として言葉になるとはどういう行為なのかを理解することにあ

る。同じ事実であっても、それを語る人間によって、まったく異なる意味を帯びる。読んだ内容から読者が受け取る事実は、実は語り手の認識と経験を通した「事実」なのである。このことを真に理解した生徒は、人間関係の誤謬や誤解に惑わされない。「Aさんがあなたを嘘つきよばわりしてたわよ」とBさんに言われたとき、Aさんを恨むのではなく、Bさんが私に期待している事実認識を静かに推察するCさんが育つのである。

さて第三は、自分自身の生き方もまた、一つのノンフィクションだという認識を抱くことにある。同じ学級集団の中で、学力や体力などの差が最も開く時代が中学校である。荒廃した家庭の鬱屈をこぼすことなく、学校では元気に明るく振る舞っているD子、自ら落ちこぼれと卑下し、自暴自棄に非行を重ねるE太。成績は優秀だが、親の過度な期待に押しつぶされそうなF夫。こうした哀しみや苦しみの中にも、それぞ

れにかけがえない人生の物語があるのだ。そうして彼らが人生に希望を持ち続けること。これこそが、ノンフィクションに託された最大の願いなのである。

## ふじもり・ゆうじ

1960年、長野県生まれ。信州大学教育学部教授。専門は国語科教育学（授業研究）、日本民俗学。著書に『授業づくりの知恵60』（明治図書出版）、『すぐれた論理は美しい』（東洋館出版社）など。光村図書 小学校・中学校「国語」教科書の編集委員を務める。

